

黙示録8章「天からの火の災い」

1A 祭壇からの火 1-5

1B 第七の封印 1-2

2B 聖徒たちの祈り 3-5

2A 七つのラツパ 6-13

1B 三分の一の破滅 1-12

1C 地 6-7

2C 海 8-9

3C 川 10-11

4C 天 12

2B 残りの三つの宣言 13

本文

黙示録 8 章を開いてください。私たちは、子羊なるイエスが、天の御座において、父なる神から渡された巻物の封印を解いていっているのを見えています。第一の封印から第六の封印までを解かれましたが、それは偽キリストの現れと、それにとまなう戦争の勃発でした。そして、その中で、殉教した魂がおり、最後の第六の封印は天変地異でした。戦争が、大きな災いになっています。8 章において、ついに最後の第七の封印が解かれます。そこから始まるのは、天からの災いです。そして、火による災いです。

前回の学び、7 章で、四人の御使いが地の四隅で、風を抑えていて、地にも海にも、どんな木にも害を加えないように抑えていたところを見ました。私たちは、天と地は神が造られ、そこにあるすべて命あるものは、神によって造られたのを知っています。しかし、人はそれを不義と不正によってその真理を押さえつけ、自分の神を拝み、悪に陥っていることを、ロマ 1 章は教えています。

そこに対して主は、彼らのご自身の恵みによって生きていることを示すために、その抑えを少しずつ取り外して行かれるのです。そうやって、彼らが、天と地をその中にあるすべての者をお創りになった方を知り、恐れ敬うことができるようにするのです。ネブカドネツアルのことを思い出してください。彼が自分の高ぶりから救い出されるには、彼が理性を失い、獣のようになって葉を食べるようにされなければ、高ぶりから救い出されませんでした。そのようになって初めて、すべてを造られた神を知り、ほめたたえることができたのです。災いの中にも、神の憐れみがあります。

1A 祭壇からの火 1-5

1B 第七の封印 1-2

¹子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。

前回、7章において、世界のあらゆるところから来た群衆が、神と子羊の前で、賛美していた幻を見ました。彼らは、キリストのゆえに殉教して、今は、天にいる人々でした。そして御使いたちが礼拝していました。このように、天は、神と子羊に対する大きな歓声が上がっています。

そのような、歓声で包まれているような天において、子羊がついに、第七の封印を解かれます。すると、「天に半時間ほどの静けさがあった」とあります。これは、主が真実をもって、聖徒たちのために、地上で行われている悪に対して正しく裁かれることを彼らは知っているからです。そのことに対する畏敬と、大きな期待がかけられて、それで静かになっているのでしょう。しかも、半時間も、つまり30分も静かにしていたのです。

主の前にいる時に、私たちは声を出して賛美する時もありますが、その畏敬の念に包まれて、静まる時もありますね。ゼカリヤも預言しました。「2:13 すべての肉なる者よ、【主】の前で静まれ。主が聖なる御住まいから立ち上がられるからだ。」主が立ち上がられる、というのは、主が立ち上がって、裁きを行われ、戻ってこられるということです。

²それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

第七の封印において、さらに七人の御使いたちが現れました。そして、それぞれにラッパが渡されます。興味深いことに、さらに読み進めると、第七のラッパが吹き鳴らされてから、さらに七人の御使いが、鉢を地上にぶちまけます。それで、神の御怒りが満ちます。

私たちはこれを、神が、その聖なるご性質のゆえ、地上に悪を滅ぼされる時に、似たような形で行われたのを思い出さないとはいけません。ヨシュアたちが、約束の地に入って、エリコを陥落させる時に、主が行われたことです。一日に、城壁を一周しなさいと主は命じられました。それを七日間行います。ところが、第七の日には、七周周りなさいと言われます。そして、ときを上げたら、城壁が崩れて、一気に攻め入ることになりました。七というのは、神の数で完全数です。主は、ご自分の裁きを行われるにあたって、七の災いをもたらすだけでなく、その第七の災いに、さらに七つの災いを入れることによって、その裁きが極みに達するようにされます。

そして「ラッパ」について考えてみましょう。旧約聖書の中に数多く出てくるものです。多く出てくるのは、「角笛」です。雄羊の角によって造られるもので、ヘブル語で「ショーファー」です。主が天

からシナイ山に降りて来られる時に、角笛の音が聞こえました。「出 19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあつて、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」ステパノが、サンヘドリンで弁明した時に、モーセの律法は御使いによって定められたとあります。つまり、主が降りて来られる時に御使いがそこにに関わり、それで角笛を鳴らしていると考えることができます。

これらの角笛は、戦う時にしばしば吹き鳴らされます。先ほど話しましたように、エリコが陥落する時に、角笛を吹き鳴らして、ときを声を上げたら、城壁が崩れ落ちました。士師ギデオンは、イスラエル兵三百人を連れて、ミディアン人と戦い、一人一人に角笛を吹かせました。

預言書には、主がさばきを行なわれるとき、主が怒りを発せられるときに、ラツパを吹き鳴らしておられます。ヨエルの預言を見てみましょう。「2:1「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときを声をあげよ。」地に住むすべての者は、恐れおののけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。」とあります。主の日において、角笛が吹き鳴らされます。続けて読むと、「2:2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が、暁とともに山々の上に進んで来る。このようなことは、昔から起こったことがなく、これから後、代々の時代までも再び起こることはない。」、さらに4節には「その姿は馬さながら、軍馬のように駆け巡る。」とあり、次回学ぶ黙示録9章の内容になっています。ですから、主の日において、万軍の主と呼ばれる神が、御使いによってこの地上に制裁を加えられるのです。

ここ8章の地上への災いは、聖徒たちに悪を行った、不信仰な世に対して、主ご自身が戦われ、復讐を果たされる姿です。第五の封印が解かれた時に、祭壇の下にいた、殉教した魂が叫んでいた言葉を思い出してください。「6:10 聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさないのですか。」この、聖なるご性質に従った裁きを、悪に対して悪で報いる復讐を、主は実行されるのです。

これは、いわゆる恨みであるとか、利己的な動機ではありません。主は、正しい方であり、聖なる方です。悪を悪のまま、ほったらかしておられる方ではありません。特に、聖徒について、彼らは主を証しているのです。彼らが迫害されるのは、彼らを否んでいるのではなく、彼らを選ばれた主ご自身を憎み、その信仰を否んでいるのです。祭壇の下にいる人々も、自分にされたことを恨んで復讐を叫んでいるのではなく、主ご自身を否んで、冒瀆している悪に対して、叫んでいます。

2B 聖徒たちの祈り 3-5

³ また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。⁴ 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

この部分を、午前礼拝でじっくりと学びました。まず、私たちが聖書を通読する時、読み進めるのが困難になるのが、主が幕屋について命じられた時のものです。そして、祭司がどのようにいけにえを献げるか。そして幕屋は後に神殿となります。紅海が分かれて、イスラエルの民がそこを通っていくとかは、ハリウッドの映画にもなるほど、壮大なものでありますが、聖書の多くの部分が、神殿や神殿における礼拝に関するものです。

それは退屈なように見えて、実はそれこそが、神の国の本質と言ってよいのです。天にあるものの写しだからです。「ヘブル 8:5 この祭司たちは、天にあるものの写しと影に仕えています。それは、モーセが幕屋を設営しようとしたときに、御告げを受けたとおりのものです。神は、「よく注意して、山であなたに示された型どおりに、すべてのものを作らなければならない」と言われました。」天にあるものを地上で示すために、幕屋と神殿があるのであり、また天にあるものの中心は神ご自身であり、血を流された屠られたキリストであります。

大祭司が宥めの日（贖罪日）に、雄牛の血を献げるのですが、その時に香をたきます。「レビ 16:11-13 アロンは自分のために、罪のきよめのささげ物である雄牛を献げ、自分と家族のために宥めを行う。彼は自分のために、罪のきよめのささげ物である雄牛を屠る。16:12 彼は【主】の前の祭壇から炭火を火皿いっぱい、また、粉にした香り高い香を両手いっぱいに取り、垂れ幕の内側に持って入る。13 その香を【主】の前の火にくべ、香から出る雲が、あかしの箱の上の『宥めの蓋』をおおうようにする。彼が死ぬことのないようにするためである。」このように、至聖所の中にある、契約の箱の上、宥めの蓋、あるいは贖罪蓋を煙で覆うようにします。

これが、聖徒たちの祈りを示しています。彼らが祈り、それが主に届けられているのが、本文の3節と4節に描かれていることです。これは具体的には、聖徒たちが復讐を主にしてくださいと願った祈りであり、もっと大きな視野で見れば、私たち教会の祈り、主が命じられた祈りであります。「マタ 6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」これあから、神の国が到来します。天にあるみこころが、地でも行われます。その時に、ちょうど隕石が地上に落下するように、摩擦熱で火の玉になるように、火の裁きとなって地上に下るのです。

⁵ それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声とどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。

今、話しましたように、これから降るのは、火による裁きです。香壇にある火が地上に投げつけられます。使徒ペテロは、ノアの時代の水による裁きのことを話した後に、こう言いました。「Ⅱペテロ 3:6-7 しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」そして、シナイ山に主が降りて来られた時に、雷鳴や声、稲妻、地震があったように、これらの現象が地上に起こります。

2A 七つのラツパ 6-13

1B 三分の一の破滅 1-12

1C 地 6-7

⁶ また、七つのラツパを持った七人の御使いたちは、ラツパを吹く用意をした。⁷ 第一の御使いがラツパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。

第一の御使いによるラツパは、「血の混じった雹と火」をもたらしました。同じく出エジプト記にて、主がエジプトの国をさばかれるとき、雹の災いをもたらされています。「9:23-25 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、主は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。主はエジプトの国に雹を降らせた。雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至るまで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち砕いた。」同じような災いをもって、今、主は全世界をさばかれています。

「地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。」とありますが、主はご自身の天地創造において造られた秩序を一部、壊されます。天地創造の三日目に、下にある水を分けてかわいたところとし、そこを陸と名づけ、水を海と名付けられました。そして陸において、種を生じる草や木をお与えになりました。そしてそこから取れる実を食べることによって人は生きるようにされました。そこで、この「木」は、実を結ばせるところの木としての言葉が使われています。

しかし、これらが神から来ているということを受け入れない、その根本的な罪があります。「ローマ 1:20-21 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」それで、黙示録では、福音というのが創造主である神を認めよ、というものです。「14:7 彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。』」

2C 海 8-9

⁸ 第二の御使いがラツパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。⁹ また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。

第二の御使いのラツパもまた、火による裁きです。「火の燃えている大きな山のようなもの」とあ

ります。大きな山とは言っていません、山のようなものです。ヨハネは、天における幻を自分の知っている言語の表現で何とか表現しようと努力しているのですが、何にも当てはまっていなかったようで、「ようなもの」となっています。

この海に対する災いは、エジプトに下った十の災いで、第一の災いを思い出します。ナイル川が血になるというものでした。「出 7:20-21 モーセとアロンは【主】が命じられたとおりに行った。モーセはファラオとその家臣たちの目の前で杖を上げ、ナイル川の水を打った。すると、ナイル川の水はすべて血に変わった。ナイル川の魚は死に、ナイル川は臭くなり、エジプト人はナイル川の水を飲めなくなった。エジプト全土にわたって血があった。」

ここでは海全体の三分の一が血となりました。そして、海洋生物が滅ぼされています。また、海上の船も三分の一が滅ぼされています。このことによって、人々の、海鮮類による食の多くが得られなくなります。また、海上の船はあらゆる商業が発達しているのですから、それが壊されるので、多くの経済活動が停止します。

3C 川 10-11

¹⁰ 第三の御使いがラツパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の上に落ちた。¹¹ この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

第三の御使いによるラツパは、「たいまつのように燃えている大きな星」がもたらされました。「苦よもぎ」とありますが、これは実際にある植物の名前です。ヨモギに似ていますが、葉がヨモギよりも細く、白っぽい感じだそうです。現在では多くの国で、製造販売が禁止されていて、理由は、神経系に作用して精神障害をおこす危険があるからだそうです。エレミヤ書には、実際に苦よもぎによる神のさばきが書かれています。「エレ 23:15 それゆえ、万軍の【主】は、預言者たちについてこう言われる。「見よ。わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。不敬虔がエルサレムの預言者たちから出て、全土に広がったからだ。」」同じように今、苦よもぎによる毒の水で、多くの者が死にました。

興味深いことに、今のウクライナで、ソ連時代にチェルノブイリにあった原発が爆発しました。そのウクライナ語の地名は、「苦よもぎ」という言葉です。ここの災いを指し示すような前兆的な出来事でありました。放射能汚染というのが、私たち人類に終末を髣髴とさせる脅威をもたらしていますが、患難時代に、河川の三分の一が苦いよもぎのようになって、水質汚染が広がります。

4C 天 12

こうして地上の三分の一、海の三分の一、そして河川の三分の一がだめになりました。次は、天

において三分の一に災いが下ります。

¹² 第四の御使いがラツパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。

太陽と月と星の光源が三分の一に低下しています。天地創造の第四日目の太陽、月、星に対して、ご自身でその秩序を壊しておられます。そして、この災いもまたエジプトに災いが下った時と似ています。「出 10:22-23 モーセが天に向けて手を伸ばすと、エジプト全土は三日間、真っ暗闇となった。人々は三日間、互いに見ることも、自分のいる場所から立つこともできなかつた。しかし、イスラエルの子らのすべてには、住んでいる所に光があった。」同じように主は終わりの日も、暗やみによってさばかれます。主の日は、先ほど引用したヨエル書に「暗黒の日」と呼ばれています。その前兆として、主が十字架につけられて正午になった時に、空が暗くなったところで現れました。

聖書は、暗闇と光の対比によって、前者が罪、また神に反逆する世、また神の怒りを表している世界を示しています。光は正義や真実、神ご自身のおられるところ、また癒しや平安をも表しています。再臨のキリストは、マラキ書で「義の太陽」と呼ばれ、イザヤ書には太陽や月の光が七倍にまでなると書かれています。

イエスは、ヨハネの福音書で、ご自身が世の光であり、光のあるうちに光を信じなさいと言われました。「ヨハネ 12:35-36 もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。36 自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」ですから、文字通りの光が少なくなり、人のいのちの支えとなっている光を、一部取り除かれると同時に、霊的に、やみの中にいることを示す裁きであります。

そして、この四つの災いを見ると、全てが「三分の一」となっていました。言い換えれば、三分の二は残っているのです。主は、この災いにおいても憐れみを示しておられます。忍耐深くあられます。人々が悔い改め、救われることを願っておられます。

それが分かるのは、その後の話です。9章の終わりに、こうした災害を受けてもなおのこと、悔い改めないでいる者たちがいること書き記しています。そして16章においては、さらに究極の太陽や暗闇による裁き、海や川の源に対する裁き、つまり残りの三分の二にも災害をもたらすのですが、それでも悔い改めない者たちがいます(9節)。これはまさに、心を頑なにしたファラオを思い出させるものであり、彼もまた、神の忍耐を軽んじて強情になったのです。(出エジ 9:15-16)

パウロは、ファラオについてこう言っています。「ロマ 9:22 それでいて、もし神が、御怒りを示し

てご自分の力を知らせようと望んでおられたのに、滅ぼされるはずの怒りの器を、豊かな寛容をもって耐え忍ばれたとすれば、どうですか。」主は、たとえ最後まで悔い改めないことを初めから知っておられても、それでも忍耐を示しておられるのです。

2B 残りの三つの宣言 13

¹³また私は見た。そして、一羽の鷲が中天を飛びながら、大声でこう言うのを聞いた。「わざわいだ、わざわいだ、わざわいが来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラッパの音によって。」

第四のラッパまで見ました。天と地と木に対する火による裁きでした。あと残りの三つの災いについては、さらにきわどさを持っています。「わざわいだ」と三回叫んでいます。それは一つ一つの災いを叫んでいるからです。それは、自然に対する災いではなく、地の中から、まさに地獄から出てくる悪霊どもによる災いだからです。「鷲」とありますが、セラフィムやケルビムは、翼があるように、この鷲も、天的な存在、御使いのような存在であることは十分に考えられます。

このように火による災いが始まりました。先ほどペテロ第二の手紙からそのことを話しましたが、その手紙には続きがあります。「3:9 主は、ある人たちが遅れていると知っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」まだ、私たちはこのような災いが下るのを見ていません。それは、神のみこころがあるからです。一人でも多く、悔い改めて滅びから免れるためです。その忍耐を思って、私たち自身も悔い改め、そして周りの人々が悔い改めることを祈り求めていきましょう。